町史の窓(15)

古代の哲多郡

岡山大学教授
今津勝紀

古代の辞書のひとつに『和名類聚抄』という本があります。源順（みなもとのしたごう）という人の撰になるもので、醍醐天皇の娘である勤子内親王の命令により、承平年間（九三一～九三八）に作られました。漢語を和名で表現することを目的とするもので、いわば漢語辞典のようなものです。この中には、さまざまな言葉が収録されているのですが、当時の国名・郡名・郷名もあげられており、そこには哲多郡も掲載されています。これにより古代にどのような郷が存在したかがわかります。

哲多郡のところには、次のようにあります。（なお、『和名類聚抄』には、高山寺本と刊本の二系統の写本があり、両者では表記が微妙に異なるのですが、ここに掲出したのは、それぞれの表現のなかで最も蓋然性の高いものとしました。注記のないものは、表現が一致します。）

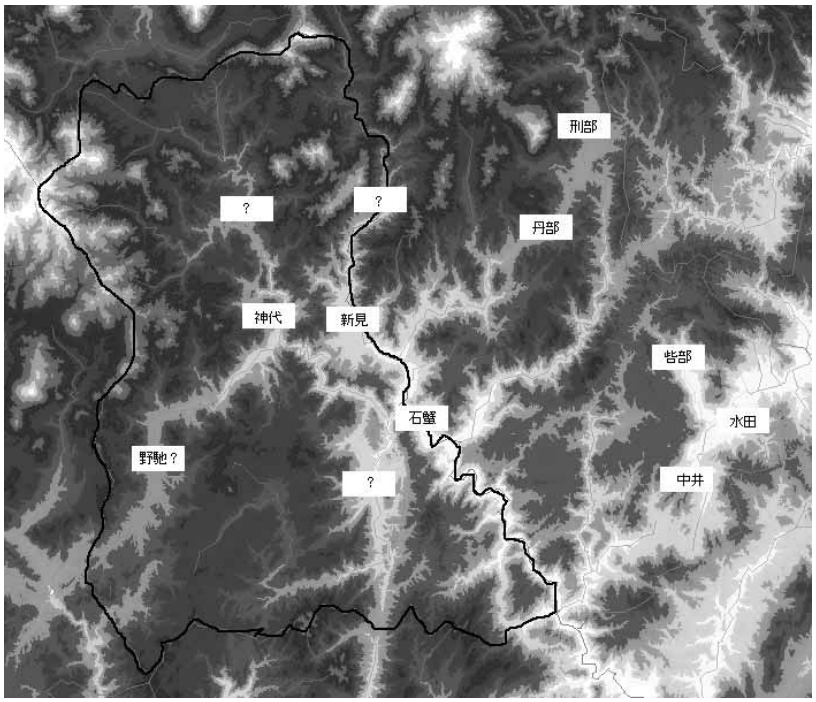
石蟹　以之賀（高山寺本）
新見　迩比見
神代　加无之呂（高山寺本）
野馳　乃知（刊本）
額部　奴加多倍（刊本）
大飯　於保比

これにより、備中国哲多郡石蟹郷をはじめとして、哲多郡には六つの郷が存在したことがわかります。石蟹の下に書かれている「以之賀」の部分が和名で、「以・之・賀」というそれぞれの漢字の音で和語の「い・し・が」を表現しています。新見は「迩比見（にひみ）」・神代は「加无之呂（かむしろ）」・野馳は「乃知（のち）」・額部は「奴加多倍（ぬかたべ）」・大飯は「於保比（をほひ）」となります。

おなじみの地名が並んでいることが、おわかりいただけるかと思います。石蟹から野馳までは現在でもＪＲの駅名です。ちょうど岡山方面から行くと、伯備線から芸備線へと乗り換えてゆくような配列でしょうか。古代の郷は、五〇の戸をあつめた人為的な組織で、基本的にどこからどこまで、というような領域を示すものではありませんが、実際は村を形成して人々は生活をしているので、五〇の戸をグルーピングするに際しては、ある程度地域的なまとまりを反映するのは当然のことかと思います。それゆえに、郷名が現在まで残る場合があるわけです。

さて、石蟹などの郷のだいたいの位置は、推測可能なのですが、問題は、額部郷と大飯郷のおおよその位置です。残念ながら直接、それを示す確かな証拠は残っていません。そこで、ひろく哲多郡の全体を見渡して郷の配置を考えてみましょう。まず江戸時代の哲多郡の範囲を大まかに示したものが、ここに掲載した図です。この図は、国土地理院が発行する五〇メートル四方の座標と標高データをもとに、その地形をコンピュータで処理し、そこに郡境、河川、郷推定地などを書き加えたものです。山の頂が白っぽくなっていますが、河川流域の色の薄い部分が平坦な地形を表現しています。人が集まって生活する中心はこうした平坦な所となります。

ちなみに江戸時代の郡域は、高梁川を境として哲多郡と阿賀郡に分かれます。阿賀郡（英賀郡）には、『和名類聚抄』で中井・水田・呰部・刑部・丹部・林郷のあったことがみえます。江戸時代の新見村は、高梁川の東側がそうよばれるようになり、阿賀郡になるのですが、古代では哲多郡に属していました。また江戸時代には、千屋の地域も哲多郡に属しています。この範囲がそのまま古代の哲多郡であったかどうかは、厳密には不明とせざるを得ないのですが、古代の阿賀郡の郷名にみえるものがだいぶ東よりのものであること、新見郷が哲多郡に属することは確実ですので、古代と江戸時代の境界には多少の違いがあることが想定されます。恐らく、新見の中心部を流れる高梁川で哲多郡と阿賀郡が分断されるのは、中世以降のことであり、古代には一体的に把握されていたのではないでしょうか。同じことは石蟹郷についても考えられます。



さて、このように郷の配置を大まかに復元してみますと、推定哲多郡内に三箇所ほど、空白地帯のあることがおわかりいただけるかと思います。一つは、神郷町を伯備線沿い

に溯っていったところであり、もう一つは新見市千屋のあたりです。さらにもう一つは哲多町の本郷周辺です。神郷町を溯った箇所は、あまり面積が広くはありません。中世には新見荘の一部に含まれていました。千屋地区は郷を構成するのに十分な空間的広がりがあります。哲多郡北部がどのような郷を構成していたのかは、中世でのありかたや、古墳時代後期の状況など、検討すべき課題が多く、現段階では明言できませんが、哲多郡南部に属する哲多町域は、本郷川の流域を中心として、一つの郷を構成していた可能性が高いと思われます。『和名類聚抄』の郷名の配列には、当然、何らかの規則性があると考えられますが、石蟹から野馳までが列挙されて、最後に額部と大飯がきます。恐らく、この二つの郷は、中心の配列からはずれると考えられますので、南北に配置するのが妥当でしょう。

今、哲多町域が何郷にあたるのか確信を持って言えませんが、額部郷か大飯郷のどちらかであることは間違いないでしょう。ひるがえって、もう一度地図をご覧いただきたいのですが、伯耆へ抜ける国境沿いに刑部・丹部（丹比部）とあるのが鍵になるかもしれません。このつづきはまたの機会にさせていただきます。

町史編さん報告会

今年夏に倉地克直先生を中心に、主として萬歳地区の古文書の調査を行いました。

９月初め、松木武彦先生が狼塚古墳の実測調査を行いました。

それぞれについて次のとおり報告会を計画しました。哲多町の新事実が数多く聞けるチャンスです。

①日時

12月20日（水）

午前10時～12時

②お話

倉地克直先生

「萬歳地区史料調査からわかったこと」

松木武彦先生

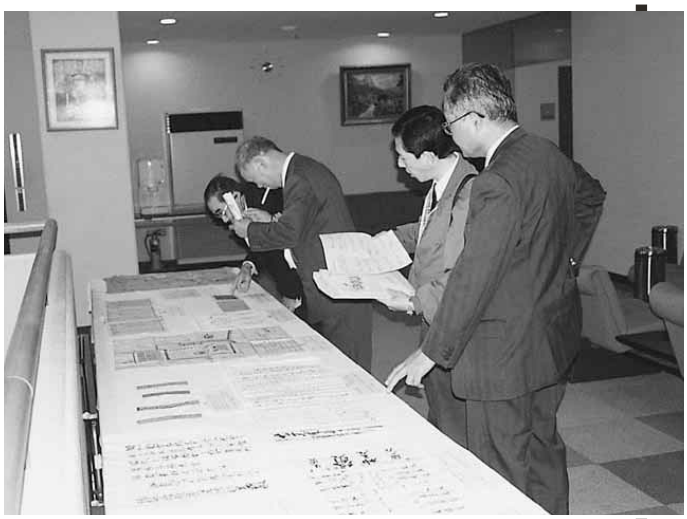
「狼塚古墳の測量調査の成果」

③お問い合せ

教育委員会（☎９６－２１１７）へ

貴重な史料がいっぱい

11月２日から４日まで町民センターで文化展を開催しました。同会場で、哲多町史に関する史料を一部展示しました。

先月号で紹介されていた毛利輝元の書状をはじめ、検地帳など13点を展示しました。中には、畜牛共進会三等賞旗などもあり、来場者は貴重な幅広い史料に興味深く見入っていました。

また、「あれ、これなら家にもありそうだ」と言う人もあり、史料発掘のきっかけとなったようでした。